

群 教 七	G02 - 03
	平28.261集
	社会 - 中

歴史的事象について、根拠を基に考え、 表現する力を高める指導の工夫

— 『政策評価カード』を活用した比較・関連付けを通して —

特別研修員 荻野 昌和

I 研究テーマ設定の理由

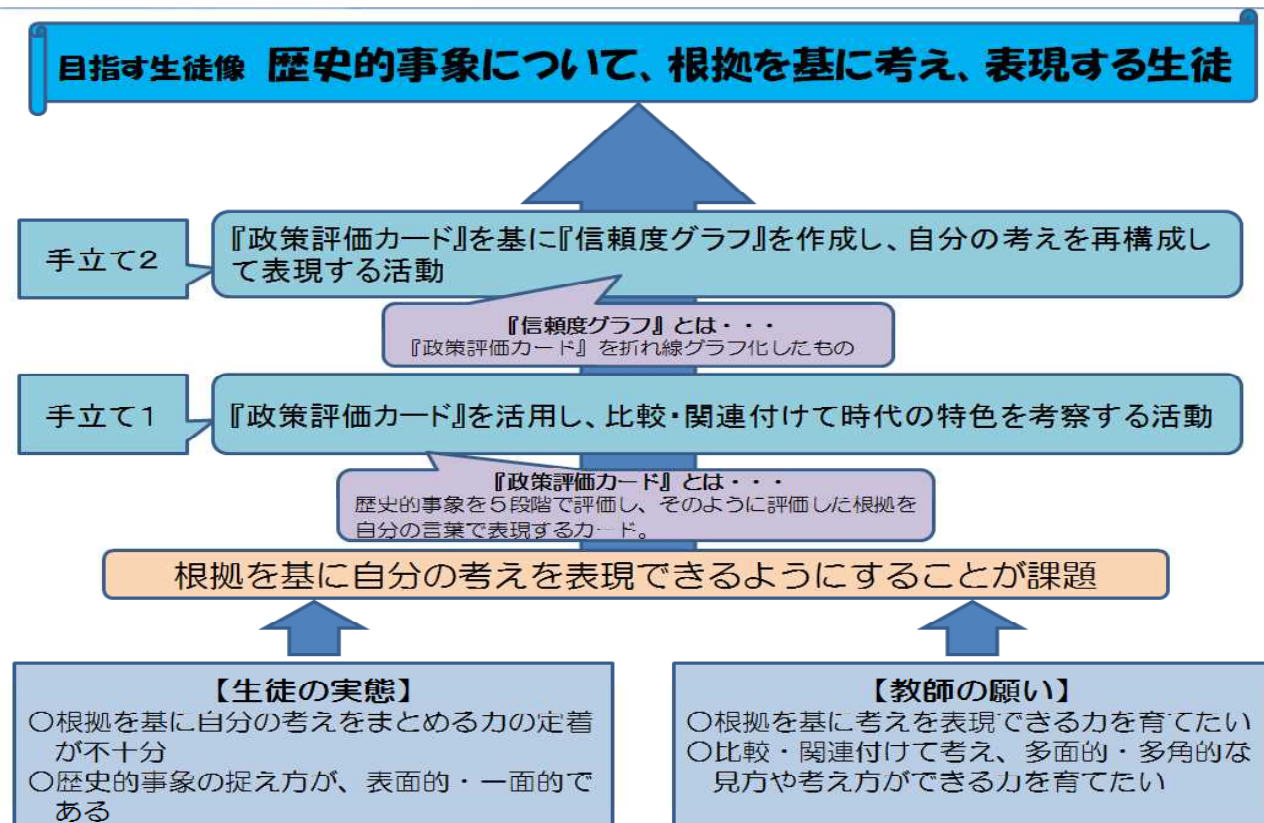
中学校学習指導要領解説では、歴史的分野の内容の取扱いで「歴史的事象の意味・意義や特色、事象間の関連を説明したり、課題を設けて追究したり、意見交換したりするなどの学習を重視して、思考力、判断力、表現力等を養うとともに、学習内容の確かな理解と定着を図ること」と示されている。また、はばたく群馬の指導プランには、群馬県の社会科の課題の一つとして「比較・関連付けて考え、社会的事象の特色や意味を理解すること」とあり、時代や文化の特色を考え、歴史の大きな流れを大観し理解する指導の充実が求められている。

本校の生徒は、歴史的事象同士の関連や因果関係について考える思考・判断を問う設問の正答率が低く、学習の過程で出てきた根拠を基に自分の考えをまとめたり、それを自分の言葉で表現したりする力の定着が不十分である。また、歴史的事象の捉え方は、表面的・一面的であり、多面的・多角的な見方や考え方ができる生徒が少ない。このため、根拠を基に自分の考えを表現できるようにすることが、今後の課題である。

そこで、歴史的事象を五段階で評価し、その根拠を自分の言葉で表現する『政策評価カード』を活用し、歴史的事象を比較・関連付ける活動を通して、根拠を基に考え、表現する力を高めていきたいと考え、上記のとおりテーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

生徒が歴史的事象について根拠を基に考え、自分の言葉で表現する力を高められるよう、次のような手立てを試みた。

手立て1

『政策評価カード』を活用し、比較・関連付けて時代の特色を考察する活動

手立て2

『政策評価カード』を基に『信頼度グラフ』を作成し、自分の考えを再構成して表現する活動

手立て1では、『政策評価カード』を活用し、家来の主君に対する信頼度と政権の権威を考察する学習を行った。五つの歴史的事象において、毎時間の授業のまとめとして『政策評価カード』を書き、信頼度と権威を5段階で表し、そのように評価した根拠を自分の言葉でまとめた。また、補助資料として五つの事象をより多面的・多角的に考察するための習熟度別資料を用意し、生徒たちが根拠を自分の言葉で表現する拠り所とした。次に、小单元ごとにまとめてきた五つの『政策評価カード』をグループで交流し、グループごとに一つの事象を割り振り、その事象における信頼度を考え、発表した。この活動を行ったことにより、生徒の根拠を基にした考えが授業に反映できるとともに、单元ごとのねらい（ゴール）を生徒がより意識して授業に取り組めるようになった。また、『政策評価カード』を基にして本時の学びと前時とのつながりを比較することができるので、歴史の関連性を考えて考察する生徒の姿が多く見られた。

手立て2では、『政策評価カード』を基に『信頼度グラフ』を5段階の折れ線グラフで表した。グラフ化して单元全体のつながりを比較しながら考察することで時代の流れを大観できるとともに、五つの事象の家来の主君に対する信頼度の変化を、根拠を基に自分の言葉でまとめ、発表した。『政策評価カード』を基に『信頼度グラフ』を作成する活動を行ったことにより、小单元ごとのまとめである『政策評価カード』を单元全体のまとめである『信頼度グラフ』に生かせるため、どの生徒も意欲的に取り組み、根拠を基にした自分の考えを表現する姿が見られた。また、『信頼度グラフ』は、グラフの数値がなぜ上がったか下がったのかについて根拠を基に説明することで、自分の考えを再構成する有効な手段となった。

これらのことから、『政策評価カード』や『信頼度グラフ』は今单元だけでなく、別の单元（室町時代の将軍の権威・安土桃山時代の信長、秀吉、家康の比較・江戸時代の三大改革・明治時代の日本の帝国主義への歩み）などでも繰り返し活用していくことで、歴史的事象について根拠を基に考え、自分の言葉で表現する力をより高められると考える。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 『政策評価カード』を活用して、家来の主君に対する信頼度を考える活動を取り入れたことで、生徒が毎時間の授業のまとめをする視点を明確化することができた。また、本時の学びと前時のつながりを『政策評価カード』を基に比較することで、歴史的事象の関連性を考えて考察するようになったり、なぜそのように評価したのかを根拠を基に考察したりすることができるようになった。
- 『政策評価カード』を基に、家来の主君に対する信頼度を『信頼度グラフ』に表し、自分の考えを再構成する活動を取り入れたことで、生徒が歴史を大観しながら歴史的事象について評価したり、グラフを作成する中で歴史的事象同士を結び付けて考え、比較・関連付けながら考察したりできるようになり、根拠を基に自分の考えを表現する力を高める活動となった。

2 課題

- 多面的・多角的に考える視点を持ち、根拠に基づいた自分の考えをより多く持つことができるように、『政策評価カード』の内容をさらに改善していく必要がある。
- 『政策評価カード』をグループで交流してまとめる時、課題に応じて文章でまとめたり、キーワードでまとめたりするなど、まとめ方を单元に応じて工夫する必要がある。

実践例

1 単元名 「武家政権の成立と東アジア」(第1学年・2学期)

2 本単元について

本単元は、武家政治の特色を考えさせ、武士が台頭して武家政権が成立し、その支配が次第に全国に広まるとともに、東アジア世界との密接な関わりが見られたことを理解させることをねらいとしている。

中世の日本は、政治的にはそれまでの天皇・貴族による公家政権に代わって武家政権が成立し、その支配体制が全国に広がり発展していく時代である。また、経済・社会的には農業や商業などの産業の発達により、大きく生活の向上が見られるとともに、都市や農村に自治組織ができ、民衆の活力を背景に新たな文化が醸成されることとなる。さらに外交においては、日本の歴史上初めて強大な外敵の脅威にさらされた元寇が起こった時代であるとともに、日明貿易や琉球の国際的な役割、東アジア世界との密接なつながりが見られるなど、歴史の大きな転換点であり、様々な面で大きな変化が見られた時代である。この武家政権が始まった鎌倉時代が、他の時代と比べてどのような違いや特徴を持っているのかについて多面的・多角的に考察する。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	武士が台頭し、主従の結び付きや武力を背景にして東国に武士政権が成立し、発展していったという時代の流れや、モンゴルの襲来が日本の政治や社会に与えた影響など、古代から中世への転換の様子を理解できるようにする。	
評価 規 準	関心・意欲・態度	武士が台頭して武家政治が成立したことや、鎌倉時代の武士や民衆の動き、東アジア世界とのつながりに関心を持ち、意欲的に追究している。
	思考・判断・表現	武家政権の成立と変遷、民衆の成長を、幕府と朝廷の関係、土地制度の変化、東アジアの情勢などと関連付け、多面的・多角的に考察している。
	技能	武家政治の成立と発展、社会の変化、文化の広がりに関する図版、文章、絵画、年表などの様々な資料を読み取ったり、まとめたりすることができる。
	知識・理解	武士が起こり、勢力を強めていった過程や背景、鎌倉時代の農村の様子やその支配のしくみを調べて考えることを通して、鎌倉幕府の政治のしくみと農民の二重支配について理解し、知識を身に付けている。
過程	時間	主な学習活動
課題把握	第1時	・武士が次第に勢力を広げたことを、関東や瀬戸内などで起こった武士の反乱を通して調べる。
課題 追 究	第2時	・上皇による院政と、その後の平氏政権について調べる。
	第3時	・武家政権の特色を、幕府と朝廷の關係に着目して調べる。
	第4時	・鎌倉新仏教や鎌倉文化の特徴をまとめる。
	第5時	・二度にわたるモンゴルの襲来と日本の対応について調べる。
まとめ	第6時	・『政策評価カード』を活用し、御家人の幕府に対する信頼度を『信頼度グラフ』で表し、根拠を基に自分の考えをまとめる。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全6時間計画の第6時に当たり、鎌倉時代のまとめを行う。歴史的事象を比較・関連付けながら根拠を基に考えることができるよう、『政策評価カード』を活用して、鎌倉時代の五つの事象(「鎌倉幕府成立後」、「源氏将軍の断絶後」、「承久の乱後」、「御成敗式目制定後」、「元寇後」)について、歴史を大観しながら御家人の幕府に対する信頼度を5段階評価の折れ線グラフ『信頼度グラフ』で表し、根拠を基に考え、表現する力を高める指導の工夫を行う。そこで、次の二つの手立てを具体化した。

手立て1

『政策評価カード』を活用し、御家人の鎌倉幕府に対する信頼度を考える活動を行い、根拠を基に比較・関連付けて時代の特色を考察する。

手立て 2

『政策評価カード』を基に、御家人の幕府に対する信頼度をグラフ化した『信頼度グラフ』を作成し、自分の考えを再構成する活動を行い、歴史的事象について、根拠を基に考え、表現する。

4 授業の実際

(1) 授業のまとめとして『政策評価カード』を書く学習

毎時間の授業のまとめとして、「鎌倉幕府成立後」、「源氏将軍の断絶後」、「承久の乱後」、「御成敗式目制定後」、「元寇後」、の五つの歴史的事象について、図1のように御家人の鎌倉幕府に対する信頼度と幕府の権威を5段階で評価し、そのように評価した根拠を自分の言葉でまとめる『政策評価カード』を書いた。『政策評価カード』を本時のまとめや振り返りに活用することで、生徒が毎時間の授業のまとめをする視点が明確化され、單元ごとのねらい（ゴール）をより意識して授業に取り組めるようになった。また、本時の学びと前時とのつながりを比較することで、歴史的事象の関連性を考えて考察できるようになったり、なぜそのように評価したのかを根拠を基に考察したりすることで、表現する力が高まった。

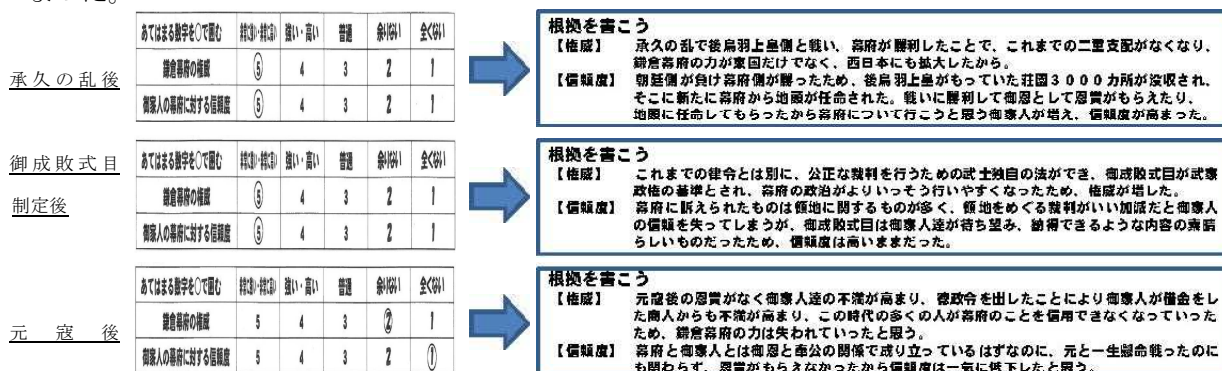


図1 『政策評価カード』（評価・根拠）

(2) 補助資料を使い、歴史的事象を比較・関連付ける学習

補助資料として五つの事象をより多面的・多角的に考察するための習熟度別資料を用いた。教科書や資料集のみから根拠を導く活動だと、歴史が得意な生徒と苦手な生徒で個人差が出たり、根拠が同じような内容になってしまったりするので、発展的な学習のための支援を行いたい生徒には高校の教科書レベルを簡略化した内容のものを、補充的な学習のための支援を行いたい生徒には、歴史の大まかな流れを捉えられるレベルのものを用意し、根拠に基づいた生徒の考えをより多く引き出そうとした。資料は生徒が『政策評価カード』に自分の考えをまとめる際にアンダーラインを引いたり、何度も読み返したりすることで、根拠を自分の言葉で表現するヒントとなった。しかし、生徒の理解度には個人差があることから、多様な考えを引き出すためにはより実態に応じた内容の習熟度別資料を用意する必要がある。

(3) グループで『政策評価カード』の内容を交流し、意見をまとめ、発表する学習

ある班の交流の内容（抜粋）

根拠を基に話し合い、自分の考えを深めたり、再構成したりする活動

- 【A】元寇後の信頼度は下がったと思います。
- 【B】私も下がったと思います。幕府と御家人との関係は「御恩と奉公」で成り立っていたはずだから、日本を守る為に命懸けて戦ったのに恩賞がもらえないと、「もう、幕府にはついていけない」と思うだろうから、私の信頼度は5から1一気に下がりました。
- 【C】そんなに一気に下がるかなあ。徳政令が出されて、御家人が商人にしていた借金が帳消しになって幕府に感謝した御家人もいたはずだから、下がったとしても2くらいだと思います。
- 【A】元寇の前からすでに、土地の分割相続の繰り返しで御家人の暮らしは苦しくなっていたと思うから、元寇の恩賞なしがだめ押しになり、私も1まで下がったと思います。
- 【C】そういう考え方もあるよね。

図2 『政策評価カード』を活用した交流の様子

図2のように小單元ごとにまとめてきた五つの事象での『政策評価カード』を4～5名のグループで交流し、グループごとに1つの事象を割り振り、その事象における信頼度を考え、ホワイトボードにグループの意見をまとめ、発表した。

生徒それぞれが考察した文章を1つにまとめるだけの交流だと、特定の生徒の意見に偏ってしまうことがあるが、『政策評価カード』は5段階評価と根拠で表現するので、5段階評価でいくつになるのか、その根拠は何かを話し合う活動は、これまでのグループ活動よりも活発なものとなった。グループでの学び合いを取り入れたことにより、

自分と友達の考えを比べ、考えを高めることができるとともに、自分の考えを再構成する手段の一つにもなった。

(4) 『政策評価カード』を基にして『信頼度グラフ』をまとめる学習

図3のように『政策評価カード』を基に、御家人の幕府に対する信頼度を『信頼度グラフ』に書いた。(3)の学習でグループの考えや発表を聞き、それを参考にもう一度自分の考えを再構成して『信頼度グラフ』を折れ線グラフで表した。グラフ化して単元全体のつながりを比較しながら考察することで時代の流れを大観できるとともに、五つの事象での家来の主君に対する信頼度の変化を、

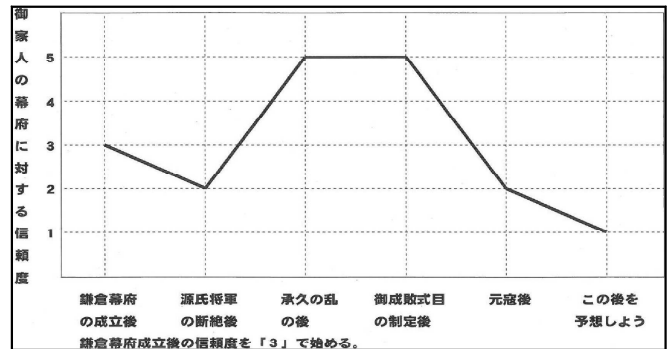


図3 『信頼度グラフ』

グラフの説明

鎌倉幕府の成立後から源氏将軍の断絶にかけては、頼朝が死んだ後たて続けに息子の頼家、実朝が暗殺されてしまい、幕府内で混乱が起こったため、信頼度は「3」から「2」に下がった。
 承久の乱後は後鳥羽上皇に勝利し、上皇側の莊園などが幕府の御家人に御題として与えられたため、幕府への信頼度が一気に「5」まで上がった。二重支配がなくなり、西国にも幕府の力が拡大したから、強い幕府への信頼は強かったと思う。御成敗式目制定後は、最初の武家法で御家人達が期待していた裁判に関する内容で武士の社会に合う法だったから、幕府への信頼度は変わらず強いまだだった。
 元寇後は、武士が元軍と戦って追いはらうにも関わらず、防衛戦だったため恩賞として十分な土地がもらえず、幕府への信頼ではなく不満が高まっていったと思う。先駆の功である竹崎末長ですら、絵詞を書いてやっと土地をもらえたので、土地をもらえなかった御家人もたくさんいたと思う。そして、北条氏らの所有地がとても広く、更に不満が高まった。その後は幕府への心がだんだん離れていき、信頼度もなくなっていったと思う。

図4 『信頼度グラフ』を活用したまとめ

図4のように根拠を基に自分の言葉でまとめ、発表した。小单元ごとのまとめである『政策評価カード』を単元全体のまとめである『信頼度グラフ』に生かせるため、どの生徒も意欲的に取り組み、根拠を基にした自分の考えを表現する姿が見られた。

『信頼度グラフ』は、鎌倉幕府成立後、幕府と御家人の信頼関係はさらに深まってくいので上昇し、承久の乱や御成敗式目制定の頃一番高くなり、元寇をきっかけに御家人の幕府に対する信頼は失墜し、グラフも急降下する形が正解だが、本校の1学年の全生徒のグラフが承久の乱後から御成敗式目後で一番高くなり、元寇後に下がるという、ねらいに近いグラフの形状になるとともに、自分なりの根拠を文章で表現することができた。また、『信頼度グラフ』は、グラフの数値がなぜ上がったか下がったのかを根拠を基に説明することで、自分の考えを再構成する有効な手段となった。一方で、十分に比較・関連付けて考察するという面では、時間的な制約もあり、課題が残った。

5 考察

『政策評価カード』は5段階評価と根拠で表現するので、生徒にとって数字の評価とその根拠を表す学習は、単に自分の考えを文章で書く学習よりも抵抗が少なく、アンケートの結果、これまでの根拠を示す学習よりも取り組みやすかったと答えた生徒が94%いた。さらに、『政策評価カード』を基に、家来の主君に対する信頼度を『信頼度グラフ』に表し、自分の考えを再構成する活動を取り入れたことで、生徒が歴史を大観しながら歴史的な事象について評価したり、グラフを作成する中で歴史的な事象同士を結び付けて考え、比較・関連付けながら考察したりできるようになり、根拠を基に自分の考えを表現する力を高める活動となった。

そして、『政策評価カード』が毎時間の授業のまとめになり、『信頼度グラフ』で単元のまとめを行うことで、生徒が根拠を基にした自分の考えで単元全体を振り返ることができる活動となった。また、『信頼度グラフ』は、グラフの数値がなぜ上がったか下がったのかを根拠を基に説明することで、自分の考えを再構成する有効な手段となった。

一方で、生徒が多面的・多角的に考える視点を持ち、根拠に基づいた自分の考えをより多く持つことができるように、『政策評価カード』の内容をさらに改善していく必要があるとともに、学力低位の生徒たちがより活用しやすい形を模索する必要がある。また、『政策評価カード』をグループで交流してまとめる時、課題に応じて文章でまとめたり、キーワードでまとめたりするなど、まとめ方を単元に応じて工夫することで、『政策評価カード』の活用がさらに広がり、根拠を基に考え、表現する力を高めていくことができるようになる。